

異文化間教育の視点から見た ホームステイプログラムのあり方 ——寮生活を送る留学生の週末滞在に着目して——

木 戸 志緒子

はじめに

2018年5月現在、全国の外国人留学生¹⁾総数は298,980人であり、文部科学省は、2020年までに「留学生30万人計画」²⁾の実現を目指している。来日した留学生は、学校生活だけでなく、学業と両立させながら日本社会の中で多様な人々と関わり、社会的、心理的に異文化環境に適応していくことが不可欠となる。今後も留学生が増加していくと予想される状況の中、留学生と日本人住民の異文化相互理解を目的とする活動は重要であるとされており、いろいろな国際交流が行われてきた。しかし、民族舞踊を見せたり、エスニックフードを食べたりする異文化理解と銘打った国際交流プログラムでは、概して楽しさという一時的な結果が重視され「その場限りの『国際交流』」(ハタノ 2006: 64)として「安易な『異文化理解』」(植田 2006: 52)に終わっているという指摘がある。また、日本人と直接接触するホームステイも異文化交流の機会として様々な形で実施されているが、あたかも日本社会における異文化理解が進むと安易に語られる傾向があり、その内実については、検証が十分されていない。

そこで本論では、ホームステイを異文化間教育におけるプログラムの一環として捉え、愛知県的高等専門学校で日本人学生と寮生活を送る留学生を対象に、日本の長期滞在中に実施された日本人家庭での週末滞在に着目する。その目的は、留学生のホームステイを通じた交流に対する認識を探り、それらをプログラムのコーディネーター、学校、受け入れ家庭などの多様な関係者の認識と比較することである。その結果から今まで表面化されていなかった、ホームステイの内実を明らかにし、最終的に異文化間教育の視点から見たプログラム

のあり方を考察する。愛知県に長期滞在する専門人材として期待される留学生が、日本社会における交流に何を求めているのかを知り、プログラムの現状と課題を明らかにすることにより、異文化間教育を促進するための知見を得ることが期待される。

第1章 研究背景

1.1 日本における国際交流の経緯

日本における国際交流の経緯について述べた榎田(2004)によれば、戦後から1960年代半ば頃までの国際交流は、一部のエリート層を中心とした相互理解と友好親善を目的とする受信型であり、市民には無関係な存在だった。1950年代に姉妹都市提携が開始され、その後1964年の東京オリンピック開催頃から、貿易や海外渡航の自由化により国際交流の裾野が広がり、主体が大衆へと移行し始めた。

「国際文化交流元年」ともいわれた1972年頃から、地方自治体も外交政策を持つべきであるという「民際外交」の理念が提唱された。1977年には都道府県レベル初の神奈川県国際交流協会が設立され、民間レベルの草の根の国際交流・国際協力団体の活動が活発になった。そして、国際交流の形が変容する中、「国際交流・国際協力が『外国人と友達になる』を意味し、表面的な外国語や外国文化のことだけ考えていればいい時代は終わった」(栗木 2004 : 88-89)。

このように国際交流・国際協力の新しい流れと方向性は、担い手、交流相手、活動内容の「多様化」(榎田 2004 : 20)へと進んでいる。日本では1950年代に始まったホームステイについても、単なる語学学習、文化体験を目的とする国際交流として捉えることによって、ホスト社会とゲストの間に起こる異文化交流の内実を見逃してしまう可能性があると考えられる。

1.2 ホームステイの誕生

ホームステイの始まりは、アメリカの Donald Beates Watt (以下、ワット) が、1933年に「アメリカの十代の学生たちを連れて、ドイツとオーストリアで各家庭に一人ずつ学生を滞在させて、文化体験を試みた」(山口 2008 : 31)

こととされる。その目的は「同じ国同士でまともならず、語学が学べて安眠ができ、その上で、食事に不自由がないようにする」（山口 2008：39）ことであった。この時代は、19世紀末から20世紀初頭の移民の流入に伴い、1920年代に多文化主義的思想がアメリカで現れ、1930年代に文化人類学が社会的に影響を持ち始めた興隆の時期に重なる。日本では、1956年にワット博士夫妻一行6名のアメリカ人が来日し、最初のホームステイが金沢市で実施された（山口 2008）。

この時代にワットは「ドイツの国やそこに暮らす人びとを、伝統文化に囲まれて、休日は徒歩旅行でワンダーフォーゲルに勤しみ、ユースホテルに泊まり簡素な戶外活動を楽しんでいるという、自分の立場から『こうあるはずだ』と捉える本質主義的な他者規定をおこなって」（山口 2008：48）おり、「自分たちの価値観でもってホストの国の人びとや文化を判断するという視点からは抜け出ていなかった」（山口 2008：48）。一方、当時の日本人ホストは、ゲストの文化に合わせようとしてベッドを買ったり西洋料理のシェフを雇ったりした（山口 2008）。

このようにワットの時代のホームステイは、多文化主義思想が出現した時期と軌を一にするとはいえ、表面的な文化体験であり、ゲストとホスト双方に本質主義的な他者規定があったと考えられる。現在では、国際交流の形が多様化し、ホームステイの目的や意義も変化している可能性がある。

1.3 異文化間教育における本論の位置づけ

本論では、ホームステイを異文化間教育の一環として捉える。異文化間教育では、「複数の文化間の接触や相互作用とその結果生ずる葛藤や統合などを分析する『相互作用的アプローチ』」（生田 2010：15）が重要である。また、異文化間の視点とは、「文化を動態的に、すなわち相互作用を通して文化は変わりうる可変的なもの」（生田 2010：15）として捉えることであり、「『関係性』への着目が特徴的である」（生田 2010：17）。

日本人と共に生活する混住寮における留学生の関係性についての報告では、「『多文化生活空間における多様な学びがうまれる実践の場』であり、寮では日

常的に多文化を意識して、主体的に様々な人とコミュニケーションをすることで多様な実践がうまれている」(吉田 2015: 2)。一方、異文化間教育の視点から見た在日ムスリム留学生の異文化滞在に伴う困難として、飲食、礼拝、メディアの報道などがあり、適応支援やホスト教育の必要性がある(中野、田中、奥西 2017)。

山口(2008)によれば、「ワットが異文化理解の先に求めたのは『異なる文化圏の国家間の関係においてではなく、個人の関係において、そこに暮らす人々との間に友情と理解の創造していく(ママ)』(Watt 1967: 23) ことが可能だとした家庭であり、それは『ホームステイ』という生活体験に結実した」(山口 2008: 56)。また、「ホームステイには本質主義的な他者規定が揺らいでしまう一瞬がある。(中略)両者が意図した接触を逸脱する場面こそ、生活の場、すなわち日常生活における互いの異文化理解の可能性が開けていたのではないだろうか」(山口 2008: 58-59)と述べている。ワットにみられた本質主義的な他者規定や、日本人がゲストの文化に合わせて普段とは異なる習慣で対応しようとする異文化理解は、異文化間教育に資するとはいえない。

これまでのホームステイに関する研究では、体験談の分析による有用性の検証(見城 1997)、日本語教育における有効性(鹿浦 2007)、ホストファミリーの経験に基づく意識調査(原田 2013)など参加者の感想や満足度に関するものが多く、ホームステイの機能自体の論理的解明は十分されていない。また、ホームステイプログラムに内在している課題については「アカデミックな観点からの研究例は少ない」(奥西、田中 2008: 88)。

本論では、ホームステイプログラムに参加した留学生、参加しなかった留学生、学校関係者、コーディネーター、受け入れ家庭など多様な関係者のホームステイを通じた異文化交流に対する認識を調査し、異文化間教育として捉えたホームステイプログラムの機能と内在している課題を明らかにする。

1.4 本論の意義

国際交流のプログラムを通して「楽しかった」、「楽しくなかった」という一時的な感想に限られるだけでは、「共生とは『仲良くしましょう』の言い換え

に止まってしまう現実」(馬淵 2011 : iv) となる。日本人と直接接触するホームステイは異文化交流として様々な形で実施されているが、植田 (2006) は「ステレオタイプな、図式化された『共生』の語られ方」について批判し、「それによって何かが隠蔽されてしまう場合がある」(植田 2006 : 46) と指摘する。

本論の意義は、ダンスや食を中心とした一日限りの国際交流イベントのように、「内実より形へのとらわれ、安易な『異文化理解』」(植田 2006 : 52) ではなく、異文化間教育における「異文化間の文化接触というものを、生涯にわたってキャリア (生き方) を形成していく」(加賀美、徳井、松尾 2016 : 12) 場として、ホームステイプログラムを捉え、留学生の日本社会への適応の一助となる異文化間教育としてのあり方を考察することにある。

先行研究では、多数の留学生を受け入れている大規模な学校で組織的に実施され、滞在期間が数カ月以上となるホームステイに関する報告が多いが、本論では学生数1,000人規模の学校内で極少数のマイノリティである留学生を対象に、地域ボランティアが実施した週末滞在のホームステイを取り上げる。

その目的は、第一に留学生がホームステイプログラムに期待していることは何か、そこにはどのような意識が働いているのか探ること、第二に、これらをプログラムのコーディネーター、学校、受け入れ家庭などの多様な関係者の異文化交流に対する認識と比較することである。その結果から、今まで表面化されなかった、ホームステイの内実を明らかにし、最終的に異文化間教育の視点から見たプログラムのあり方を考察する。

第2章 調査対象および方法

2.1 調査対象

本論では、愛知県T市の高等専門学校 (以下、高専) を調査対象とする。高専が位置するT市は、1988年のT市国際交流協会 (以下、TIA) 設立以来、「国際化の主役は市民である」の理念の下、国際交流・国際理解教育・多文化共生を三本柱とし、地域の国際化を推進している。

高専の特色は、「中学校を卒業した若い年齢の青少年を受け入れ、その後5年間にわたる一貫したカリキュラムにより一般教育及び専門教育を行うところ

にある。特に実践的な技術の学習を重要視し、工学理論を実際面に生かす能力をもった技術者を育成することを目的としている」と学校案内にある。学生総数は例年約1,100人、寮生は約650人、内、留学生は約10人である。留学生は5年制の第3学年に編入し、入学時に日本語を十分理解できる能力を必要とされる。在学中の3年間を通して学生寮で日本人学生とともに過ごす。

本論の調査対象は、ホームステイに参加した留学生、参加しなかった留学生、地域で活動するコーディネーター、学校、受け入れ家庭、国際交流協会である。これらの異なる立場の多様な関係者のホームステイに対する認識の共通点、相違点を明らかにし、プログラムの現状と課題を分析する。

高専の留学生を調査対象とした理由は以下の3点である。第一に、卒業後も愛知県と出身国に貢献する人材として受け入れている留学生であり、観光などの短期滞在中ではなく、将来のキャリアを視野に入れた長期滞在中のホームステイであること、第二に、留学生が3年間の寮生活を前提とし、公私ともに日本人学生との接触が多いため、ホームステイ独自の意義を明らかにできると予想されること、第三に、留学生は来日前後に1～2年の予備教育を経てから編入するため日本語能力が高く、語学力を向上する目的の優先順位が第1位ではないと予想され、語学力以外の目的が明らかになる可能性があるためである。

2.2 調査方法

高専の留学生を対象とした2泊3日のホームステイは、2016年度よりTIAのボランティアグループO（以下、グループO）と連携し初めて実施され、翌2017年度に2回目を実施された。本調査は2018年1月に実施され、4名の留学生が参加した2回目のホームステイについて実施した。グループOは、TIAに所属し20年以上短期ホームステイの受け入れをコーディネートしてきた。筆者は2017年度よりこのグループに所属しコーディネーターの立場で本調査を実施した。

調査は、2018年1月～2018年8月の期間に、T市内でのインタビュー調査とメールによる質問、回答により実施した。本調査で質的調査を行うのは、数量的なデータの分析ではなく、協力者個々の認識について詳細なデータを得る

表 1. 協力者の詳細

発話者略称	属性・役職	年齢	性別	備考
RA	モンゴル留学生 A	23歳	男	来日 3年ホームステイ参加
RB	カンボジア留学生 B	21歳	男	来日 4年ホームステイ参加
RC	マレーシア留学生 C	22歳	女	来日 3年ホームステイ不参加
RD	マレーシア留学生 D	21歳	女	来日 3年ホームステイ不参加
KG	学生支援担当職員	60代	男	窓口として協力
KK	国際交流担当教員	40代	男	留学生受け入れ担当
KR	寮務担当教員	50代	男	寮生活担当
KJ	日本語指導担当教員	30代	女	「日本事情」担当
KN	保健室看護師	60代	女	保健・相談業務
TS	国際交流協会職員	30代	男	メール回答
OD	コーディネート グループO代表	52歳	女	無償ボランティア グループ所属約10年
AH	留学生Aの受け入れ家庭	30代	女	無償ボランティア、初受け入れ
BH1	留学生Bの受け入れ家庭 母	40代	女	無償ボランティア 3回目受け入れ
BH2	留学生Bの受け入れ家庭 娘	16歳	女	

(木戸 2019より一部修正して引用)

ことを目的とするためである。協力者11名には、日本語で約60分の半構造化インタビューを行い、同意を得てICレコーダーに録音し、文字起こしをした。保健室看護師とグループO代表のインタビューでは、録音はせず逐語記録を筆者が書きとめた。後日これらを筆者が主旨に影響の及ばない範囲で再構成した。TIA職員1名は、メールで質問、回答を受け取った。協力者の詳細を表1に示す。ただし、本稿では紙幅の関係で14人の協力者の内11人の語りを取り扱う。

インタビューおよびメールによる主な質問内容を以下に示す。

参加した留学生——普段の生活状況、ホームステイに参加した経緯、目的とその理由、前後の変化、受け入れ家庭との交流、プログラムへの要望
 参加しなかった留学生——普段の生活状況、ホームステイに参加しなかった経緯、参加する場合のプログラムへの要望
 高専の教職員——留学生の教育内容、寮生活と日本人との交流、日本語教育、

日本語力、ホームステイプログラムを導入した経緯、その目的、実施方法
国際交流協会職員——受け入れの方針、目的、広報や告知の方法、課題
コーディネートグループ代表——現在までの活動内容、今回実施した経緯、
ホームステイプログラムの目的、実施内容、プログラムの課題
受け入れ家庭——今までの受け入れ経験、受け入れの経緯、目的、留学生との
交流の様子、受け入れ後の留学生との交流、プログラムへの要望

第3章 留学生の生活およびホームステイに対する関係者の認識

3.1 留学生の学生生活——寮生活と日本人との交流

まず、普段の留学生の寮生活と日本人との交流について教職員に尋ねた。近年の留学生の傾向について寮務担当職員（以下、KR）は、「目的、学力、将来の進路も様々で、日本人の学生との交流、寮の規則を守ってもらう上でいろいろなパターンが出てきた。留学生からこちらが思うようなレスポンスが返ってこない（中略）たぶんそれはコミュニケーションがうまくとれてなかったからだと思う」また、「留学生には留学生の慣習があって、頭では理解できるが納得いかないところがあることに最近気づいた。（中略）あなたたちの国ではどうだったということを学校として一回も聞いたことがなかった」（2018年7月13日）と述べた（筆者注：文中の下線は筆者による強調であり、以下同様とする）。

このような留学生の考えを聞きサポートを増やす必要性を、日本人学生、教員が異文化理解の問題として気づき、それを解決するために Global Friendship Agency (GFA) という委員会を作り、日本人学生との交流を深める努力をしている。

KR：留学生が母国の料理を作って、寮生にふるまう食事会が年に一回ある。それを今年は納涼祭という夏のイベントで出店させた。日本人学生のイベント委員会が用意するので一緒に準備していないが、日本の風土、習慣を体験させたくて留学生に声をかけたら、ほぼ全員が来た。流しそうめんは、イスラムの関係で醤油やみりんがダメという子は見るだけだったが、

なかなかそういう経験は寮ではできない。なかなか学校生活が忙しいが、そういうイベントにできるだけ参加させたい。（2018年7月13日）

この行事についてマレーシア留学生D（以下、RD）は「寮祭の時は自分の国の料理を紹介しますから、作りますからいい経験になると思います」（2018年7月28日）と述べた。普段忙しくて教員が異文化体験をさせたくても時間がなく、日本に滞在し日本人と寮生活をしていても、日本社会の習慣や慣習に触れる機会が少ないことがわかる。次に、留学生の相談を聞く機会の多い保健室の看護師（以下、KN）によれば「3年生は生活と勉強、日本語で手一杯で、4年生になると寂しいと話しに来る」（2018年6月20日）という。

一見、日本人学生と同様にみえる悩みもあるが、異文化の中で感じる勉学、日本語、寂しさなどの悩みにはどのような背景があるのか、さらに留学生のインタビューの分析を進める必要があるため3.3に示す。

3.2 ホームステイプログラムの目的と経緯

次にグループO代表（以下、OD）に活動の目的と実施した経緯について聞いた。

OD：家庭に入るとホストファミリーが、日本人のお客よりも親戚の子みたいに接するので、ホームステイで日本にも家族を作ってホームを見つけてほしい。受け入れ家庭にとっては、家庭内をものすごく簡単に国際化できる草の根交流であるということで、例えばホームステイに反対だった父親が一番積極的になるとか家庭内に変化が起こる機会になることがある。（中略）

2016年に、海外留学から帰国した知り合いの日本人学生がいて、その体験について発表する場所がなかったので、グループOとコラボしてイベントを開催した（高専生は6人中3人）。このイベントをきっかけに高専には留学生もたくさんいるけれど、どのように日本人と交流しているのか話題になった。学校で3年間日本人学生と生活はしているが、普段の行動は自転車で行ける範囲で、寮以外は観光旅行ぐらいで、住んでいる地域で

はどこにも行っていなくて、T市のこともあまり知らない、日本家庭に接する機会はほとんどないのではないか。(2018年1月20日)

こうして高専卒業生の保護者であるメンバーが学校に連絡し、ODが2016年10月末にホームステイを提案し、翌年1月に初めて実施した。留学生の生活については明らかでないが、地域の人に接する機会が少ないことがこの語りから窺える。

3.3 留学生の参加前の認識

カンボジア留学生（以下、RB）とモンゴル留学生（以下、RA）が、ホームステイに参加した動機を語ったときに、日本人学生や地域との関係も明らかになった。

RB：日本の家庭を経験したかった。日本の家庭生活を全くわからないから。毎日寮で同い年の学生で。留学してきた日本人とは交流が多い。外人と接触するのに慣れていて親しくなれる。普段日本人の友達と出かけとかしてないので、寮に引きこもって。(中略) 休みとか日本人も実家に帰っちゃうから、残るのは留学生だけで留学生が集まって旅行行ったりとかする。(2018年7月7日)

RA：3年生の夏ごろ、ホームステイしたいと一人で先生に頼みにいった。理由は、あんまり日本人の学生と関われなかったから。日本の生活の中で家族のような人たちと出会ったらいいなと思った。そうしないと結構一人でしたから生活があんまり楽しくなかった。勉強するにも精神的に大変でした。(中略) いろいろな人と話したいが、今までは、クラスメートや学生と挨拶ぐらいで会話が续かなくて、それ以外の会話をあまりしない。みんな優しく挨拶するんだけど、お互いのもっと深い話とか、そこまでできる人たちにもしかしたらホームステイで出会えるかなという期待があった。(2018年3月28日)

これらの語りから、寮の同年代の学生とは異なる日本人と接すること、家族のような交流をして精神的支えを得ることをホームステイに期待しており、グループOの目的との共通点がみられる。教職員は、学校生活の中で特に寮生活は、勉学と日本人との交流やコミュニケーションを促進する上で重要であると認識している。しかし留学生は、普段の日本人学生との親交があまり深まっていないと感じていた。学内ではGFAや教員が計画を立て交流のために努力もされているが、日本人の文化を見せるイベントでは、留学生は受け身の立場であるだろう。

また、国際交流担当教員（以下、KK）は日本人学生と地域の関係について「愛知県内、県外からもたくさん来てるので、この地元っていう子がもちろん多いんですけど、そんなに交流があるわけではない」（2018年7月26日）と語った。ここで、留学生が学校以外の日本人との交流を求めていることが明らかになったため、日本人学生の地域との交流がない状況とは背景が異なると考えられる。日本人との文化接触の意義や方法について、教職員と留学生の認識に差異があるといえる。

一方、ホームステイに参加しなかったムスリムのマレーシア留学生C、D（以下、RC・RD）は、日本人学生との関係性と、ホームステイプログラムに参加しなかった理由について、次のように述べた。

RC：（筆者注：日本人との外出は）1年で5回ぐらい。友達の家とか食べに一緒に。去年は長島スパランドへ行って友達から誘ってもらって全部乗りました。楽しかった。チューター³⁾は3年生の時あまりしゃべれなかったけど、4年生、5年生はもっと関係がよくなった。3年間同じ人で1年目はたぶんお互いのことはあまり知らないけど。（筆者注：留学して嬉しかったことはチューターと）お互いに関係がよくなったこと。勉強するとか、普通の食べ物一緒に作るとか、お風呂入るとか面白かった。お互いに文化を学びました。寮のイベントが時々ありますけどよく参加する。それはいいなと思います。マレーシア料理を紹介してあげました。（2018年7月28日）

RD：寮は私たちは一人部屋ですから日本人と話し合うことがあまりないですから、ホームステイに行ったらもっと話し合いたいと思う。(2018年7月28日)

RCは日本人学生と良好な関係を築いており、学校のイベントにもよく参加しているため、前述のRAのような孤独感を感じられない。RDはRA、RBと同じように日本人とのコミュニケーション不足を感じていた。ただし、RDは5年生になった今は「他の同じ研究の人たちと意見を交換していろいろなことをしゃべります」とつけ加えたことから、学年の違いによっても認識が変わることがわかる。RCとRDはホームステイに参加しなかった理由を次のように述べている。

RC：楽しいみたいだけど行けなかったですね。日程ではなくていろいろな問題がある。食べ物とか心配して。ハラル肉はインターネットで頼むと量が多いことや、男性や犬に触ってはいけないことなどが、受け入れ家庭にとって面倒だと思う。(中略) 男性には、私たちは髪の毛とか腕や首、全部見せてはだめ。小学生までぐらいなら……。 (筆者注：滞在期間は) 短い方がいい。(2018年7月28日)

RD：3年生の時は日本語あまりしゃべれないからちょっとホームステイに行くのと心配がありますから行きませんでした。ホームステイは他の人の家に泊まりますから、私はイスラム教でヒジャブを使わなければなりませんから男性から見えないように。これはちょっと迷惑と思って不安があります。私たちイスラム教徒は犬は触れませんからペットはいない方がいい。(2018年7月28日)

RCとRDは、関心はあるけれども宗教上の慣習の不安で参加に至っていない。また、ホームステイに参加するとしたら期待することについて次のように述べた。

RC：料理が好きなので日本の料理とか教えてもらいたい。今は自炊で、近くのレストランにハラルがないから。(中略)日本の文化、お抹茶とか、花火一緒に行きたいとか、伝統的なものに触れる機会はなかった。ホストファミリーは植物とか育ててますか。日本人のおじいさんとかおばあさん植物を育ててるけど、もしあればガーデニングを学びたい。(筆者注：日本の家庭は)行ったことないですけど、お父さんがよく子どもと一緒に食べ物とか買っている、それは日本人の文化と思います。お父さんと子どもの関係がよくなる、それはすごいなと思います。マレーシアは全部ではありませんが、ほとんどの男性が子どもをお母さんに全部まかせています。日本に行くとな寂しくなるんですけど、楽しい家族があったらもっと幸せかな。(2018年7月28日)

RD：日本の料理の作り方とか着物の着方とか、着たことないですから。日本の歴史とか知りたい。(筆者注：専攻は環境土木で)日本の壁はマレーシアの壁と違いますから、(筆者注：学校で)学べますけど日本で経験しないと違いはあまり理解しませんから。ドラマを見るときは、日本の家庭はいつも弁当をもらって学校や会社に行って、マレーシアにはないです。(筆者注：日本の家庭は)晩御飯はいつも家族と食事をしますから。マレーシアはあんまりないです。(2018年7月28日)

これらの語りからホームステイに参加する場合に期待することが、自分の好きなことや専門に関連していることがわかる。日本家庭のイメージについてはドラマから得ており、生活面の不安もあるが、ハラルや食堂、母国の料理など食事への不安や希望が大きい。RAとRBの精神的支えを得ることや普段とは異なる人間関係の構築への希求とは異なり、RCとRDは日本の伝統文化を体験したいと考えており、抹茶や着物、花火、ドラマで見たものを日本文化と考えている。

3.4 受け入れ家庭および留学生の参加後の認識

前述のムスリムなど食事制限のある学生の受け入れについて RB の受け入れ家庭の母（以下 BH1）は、「豚肉がダメな人だと、そういう豚肉を調理した調理器具は、もうだめみたいなこと聞いたけど、そうすると食器、調理器具、鍋を新しくしないといけないよね。」（2018年3月24日）と予想して難しいと考えていた。マレーシアのマレー系の家に留学経験のある娘（以下 BH2）は自身のマレーシア留学の経験を話し、受け入れは可能だと考えていた。

BH2：お母さんがイスラム教徒で、お父さんが中国系で仏教だったから、頭にスカーフとかは巻いたりするけどみんながいる前、家とかではお祈りとかしなくて、学校でみんなといるときだけお祈りするような感じだった。食事は制限とかはしてたんですけど、そんな気遣ってるわけでもなかった。（中略）（筆者注：RB から聞いた話として）イスラム教の子で食べられない女の子はホームステイも行けないって。自分でご飯作ってるぐらいだめだから行けない子がいるって言ってた。だからせっかく日本に来てるのにそういう子が食事とか宗教とかで行けなくなってるんだったら……。 （2018年3月24日）

BH1 は、ムスリムの食事制限について具体的な正しい知識が不足している。また、BH2 は、食事を理由にホームステイプログラムに参加することを諦めている留学生がいることについて、「せっかく日本に来てるのに」という認識を持っている。また、寮では、女子学生は1年目、男子学生は2年目から個室で、自炊するための調理室が別であり、異文化の慣習を日本人学生が直接見て知る機会が限られることがわかった。

また、留学生の RA と RB、それぞれの受け入れ家庭 AH と BH1、BH2 のホームステイに参加した後の認識についての語りを示す。

RA：自分の今までの経験を二人の女の子たちとか家族の両親と話せたので、お互いの今までどっからどういう風に進んできたかを理解できたこと、日本

の普通の家族はどんな生活しているかわかったことが良かった。日本とかモンゴルとか関係なく、人としてつながりができて一番意味があると思う。

ホームステイの後、日本人のことをちょっと理解できるようになった気がして、東京であるイベントとか、起業している人たちの集まりとかで、そういう人たちの雰囲気を感じてみたいと思って、イベントに参加した。日本人だけでなくいろいろな国から人が来ていて、チームプロジェクトを三日間やる時とか積極的になれた。寮や学校の人間関係とホームステイは違って、その後いろいろなところで役に立った。(2018年3月28日)

RB：いい経験で日本人のことが少しわかった。日本のイメージは和風の居間で集まって、家が小さくて暖かい、映画で見た。日本文化いろいろ見たけど、もっと理解するために深く入りたい。(中略) 普通外人の日本のイメージは、着物、畳にすわって箸を使ってごはん食べるとか、お茶飲んだり、そういう代表的なもの。日本に長い時間いると代表的なものは慣れてきて普通と思っちゃう。それに代表的な文化は日本のどこでも見られるし、外国に見せるための文化ではなくもっと深く知りたかった。(2018年7月7日)

ホームステイに参加して RA は日本の家族と国籍に関係なく話すことができたと考えており、自分の人生について語れたことや新しい人間関係が構築できたことに意義を感じている。また、プログラムに参加したことで積極的に次の行動につながる機会を求めようになり、専門を生かすことや他のことに挑戦する機会が欲しいと考えるようになった。RB は長期滞在しているため、日本の伝統的なものよりも家庭の雰囲気を体験したいと考えていた。

一方、RA を受け入れた AH は、夫と娘の変化について次のように語った。

AH：主人の反応が心配だったが、実際には、日本語が通じるのもあって主人が積極的で、こんなにしゃべるんだって。ずっと女子の中で生活してき

て、ほんとにかわいらしい息子みたいな男の子が来て、すごい喜んだ。
多分主人が一番喜んだんじゃないかと思う。(2018年2月2日)

RAとAHは特に交流が深まったと考えられる。AHは2回目に短期滞在で来日している学生を受け入れたが、学びに来た留学生のために何か成果を出さなくてはというプレッシャーのようなものがあったという。高専の留学生は、このような一時滞在の留学生とは異なり、週末に立ち寄るようなホームステイだったため、受け入れ家庭へのプレッシャーが少なく、交流を深められたとみられる。

RBを受け入れたBH1、BH2は以下のように語った。

BH1：今まで来た子は日々プログラムがずーっとあって、夜の数時間しかいない感じだったので、それとは全然違ってゆったりできたし、一日中ずっといたからほんとに家の中で過ごしてもらう時間があった。今まで女の子だけ料理するほどの時間もなくて。今回は一緒に最後の持ち寄りパーティーの料理を作るのもやってくれたし、わりと共有の時間が多かった。(2018年3月24日)

BH2：日本語で普通に数学を教えてくれるからかてきょー(筆者注：家庭教師)みたいだった。ガソリンのセルフのスタンドで自分で入れてたら、日本ではこうやって入れるんですかって聞かれた。だからいろいろ聞いてくれれば答えられるし、日本ではこうやって自分で入れなきゃいけないのかって、私たちが思わないようなことでもそう思うんだ、面白いねっていうのがありました。(2018年3月24日)

ホームステイプログラムの内容では、日本の伝統文化を体験することや観光スポットを訪問することに注目が行きがちであるが、一緒に料理をしたりして家庭で時間を共有することにも意義があることがわかる。高専の留学生は、専門分野が理系科目であるため、RBは家庭教師のような役割ができた。また、日

本の一般家庭の生活に興味を持つRBを見て、BH2が自分が想定しないことに留学生が興味を持つことを知り、このような交流に関心をもったことがわかる。

さらに、日本人学生と留学生があまり交流していない理由と、その状況についての考えを、RAは次のように語った。

RA：自分があまりしゃべらない話しかけない人で、顔が外国人のように見えない。よくあるのが日本人は外国人を、顔色が違うとか、ヨーロッパっぽい感じとか、髪の毛の色が違うとかで外国人と認識していて、自分とは違うアジアのモンゴルという国にはあんまり興味がない。もし私がヨーロッパとかアメリカの留学生だったら、もっといろいろしゃべった気がする。

誰ともしゃべらない日とか結構あって、こうなるとあんまり日本人のことも理解できなくなる。みんなと接することでお互い理解するけど、自分の中だけで考えたことで行動したりしゃべるから、接しないと何にもほんとのこと知らずに自分だけの考えだとたぶん違ったりすると思う。(2018年3月28日)

これらの語りから、RAは日本人学生に外見で判断されていると感じ、欧米の留学生との違いを意識している。RAは自分や自分の国に関心をもたれていないと感じ、日本人学生に対するステレオタイプを、表面的で裏付けのない認識として持っている。一方で、日本人とのコミュニケーションの重要性も自覚しており、改善したいと考えている。RAは、本質主義的な他者規定とみられるステレオタイプと日本人を理解したいという希求の間で悩みを抱えていたことがわかる。

第4章 ホームステイプログラムのあり方

4.1 留学生のホームステイプログラムへの期待と不安

ODが、学校に提案することでホームステイプログラムが実施された経緯の中で注目されるのは、グループOの提案と留学生の要望に共通点があったこと

である。留学生の求める「日本人との関わり」は、単なる2泊3日の滞在先としてではなく多面的な意義を持っていた。特に教職員の視点との大きな違いは、教職員は、ホームステイを日本文化体験の機会と考えているが、留学生は寮生活や学校生活とは異なる文化接触を強く求めていたことである。その背景には、日本人学生との交流の不足、日本社会での人間関係の希薄さがあり、留学生は、日本で現状よりも親交の深まる文化接触をしたいという期待を持っていた。孤独感の軽減、家族のような人間関係の構築、寮生活で接しない人との出会いへの希求がホームステイプログラムへの参加につながっていた。

吉田(2015)は、混住寮で多様な文化実践が生まれている事例を報告したが、留学生が特に少数である本事例では、前述したように孤独感や閉塞感を感じ、勉学の促進の弊害となっていた。学校や寮の人間関係の中では解決できない、勉学や交流に感じていた困難を乗り越えるきっかけとして、ホームステイプログラムが有効であったと考えられる。一方、プログラムに関心があってもホームステイに参加しなかった留学生には、日本語力と慣習に関する不安が大きかった。ムスリムの学生にも、日本人がムスリムに対して「こう考えているはずだ」と捉える本質主義的な他者規定がみられた。

4.2 寮生活を送る留学生の週末滞在の意義

ここでは、寮生活を送る留学生にとっての週末滞在の意義について考察する。

高専は国際交流が盛んな学校で、教職員や日本人学生によって多くの交流のための努力がなされていた。しかし、日本人学生との人間関係を深化させるまでには至っておらず、学校行事としてのイベントは「その場限りの『国際交流』」(ハタノ 2006:64)になっていた可能性がある。それは、学校において留学生が日本人学生のイベントに異文化体験のために参加したり、母国の料理を紹介する機会があることが良い体験にはなるが、留学生にとって主体性のある能動的な活動ではないことが一因ではないかと考えられる。

本事例のホームステイプログラムの意義は、日本文化を知ることよりも、留学生が家族の一員として迎えられることにより、親密な人間関係を日本

で構築し、その機会を次の人間関係につなげていくことであった。ホームステイから構築された「家族のような関係性」は、人間形成や発達過程を組織していく上での教育的意義であると考えられる。

これまでホームステイプログラムは、日本文化を体験することや日本語が上達することに注目が集まり、異文化交流と称して様々な形で実施されてきた。しかし本事例では、様々な悩みを抱える長期滞在中の留学生が、孤独感や閉塞感を軽減するための、精神的な支えや心の拠り所として機能していた。留学生は、母国から離れている寂しさを埋めるために、家族同様に感じられる存在を日本で求めている。そのために、長期や遠方ではなく、特別なイベントでもない気軽に参加できる週末滞在の形式に意義があったといえる。受け入れ家庭にとっても特別扱いは不要だった。このように留学生の目的が共有され果たされたときに、参加者全員にとって楽しいだけではなく意義のある交流になるといえるのだろう。

4.3 異文化間教育の視点から見た現状と課題

以上のことから、現状として学校では、ホームステイを通じた異文化交流に対する認識において留学生と教職員の間で差異があり、留学生がなぜ参加するのか、参加しないのか、その期待と不安の背景が十分理解されていなかった。留学生側から積極的にコミュニケーションをとるためには、日本語力が必要となるが、特に編入学時は日本語がほとんど理解できない場合があり、教職員の認識と実際の差が大きい。そのため、参加しなかったムスリムの留学生の日本語や宗教的慣習、食事制限に関する不安は教職員に十分に伝わっていなかった。また、留学生が日本人と暮らす寮生活は、異文化交流の場として位置づけられている。しかし、寮生活をするが故に、日本社会について知るための異文化間教育の実践が、留学生をサポートする日本人学生のチューター頼みになっている可能性も考えられる。

異文化間教育の視点から見た課題として、留学生にホームステイプログラムの意義が理解されず、関心が高まらなかったり、参加したいと思っても不参加となる場合が考えられ、プログラムが十分活用されていないことが挙げら

れる。ホームステイプログラムへの参加の是非は本人の自由意志であるが、異文化間教育の機会や選択の幅を狭めることは留学生に資するとはいえない。「学習したことを本当の場で使わせる機会を作り、その中で学習者に気付きや達成感・自信を与えることも、教育の重要な仕事」(溝口 1995: 115)である。

例えば、受け入れ家庭は日本語力や慣習による制約があっても寛容に対応でき、事前のマッチングで調整可能である。このような正しい情報を留学生に提供することによって、ステレオタイプを無くしていくことが必要である。また、留学生からも受け入れ家庭に対して、必要な条件や要望を具体的に伝えることによって、異文化理解が促進される機会が創出される。

結論および今後の展望

本論では、留学生と関係者への詳細なインタビューにより、ホームステイの内実を明らかにした。ホームステイプログラムには、留学生が学校や寮では解決できない困難を乗り越えるきっかけを見つけ、自信を持つことによって行動範囲を広げる機会を創出する効果があることが明らかになった。また、週末滞在でも異文化間教育としての意義があることがわかった。さらに、留学生の期待や不安の内容を関係者が理解し、ニーズに応えられることを留学生に伝えることが重要であるとの結論に至った。

このように参加者の目的を理解し、不参加者の理由を解決するプロセスにより、関係者間の相互作用が起り、留学生、受け入れ側双方の異文化間教育としての意義が生まれる。このような取り組みが、他者規定を覆すきっかけになり、「その場限りの『国際交流』」(ハタノ 2006: 64)で一時的な結果をもたらすイベントとして終わらせないことが可能になるだろう。

今後は、ホームステイプログラムにおいても担い手、交流相手、活動内容の「多様化」(榎田 2004: 20)に対応していく必要がある。日本社会における人間関係の構築を異文化間教育における意義と捉えることで、留学生だけでなく多様な対象を視野に入れた研究への展望が期待できる。例えば、日本人受け入れ家庭という固定観念に捉われず、年齢や世代、性別、国籍、家族構成、専門など、多様な受け入れ家庭の参画によって、日本社会における異文化間理解の

促進につながるであろう。

謝辞

本研究は、愛知県立大学研究倫理審査人社29-03の許可の下、実施した調査に基づいて執筆した、2018年度の修士論文を基に加筆、修正したものである。

調査に協力して下さった高専の留学生、教職員、国際交流協会の職員、ボランティアおよび受け入れ家庭の皆様にご心より感謝する。

注

- 1) 高等教育機関及び日本語教育機関における総数で、大学院、大学(学部)、短期大学、高等専門学校、専修学校(専門課程)、準備教育課程、日本語教育機関における在籍状況を示す(日本学生支援機構 2019)。
- 2) 大学等の在籍者(約300万人)に占める留学生の割合を非英語圏先進国のドイツ、フランス並(10%)の割合へと目指し、外国人留学生30万人を目標に設定した(文部科学省 2016) 政府が2008年に発表した政策である。
- 3) 入学後留学生の生活面、勉学面でサポートする同じクラスの日本人学生。

参考文献

- 生田周二, 2010, 「生涯学習の観点からみた異文化間教育——シティズンシップ教育との関連において」, 『異文化間教育』31: 5-18, 異文化間教育学会.
- 植田晃次, 2006, 「『ことばの魔術』の落とし穴」, 『「共生」の内実——批判的社会言語学からの問いかけ』29-53, 東京: 三元社.
- 榎田勝利, 2004, 「国際交流・国際協力の新しい潮流と方向性を探る」, 『国際交流の組織運営とネットワーク』10-35, 東京: 明石書店.
- 奥西有理, 田中共子, 2008, 「ホストの異文化接触に関する研究課題の展望——ゲストとの交流と関係性についての実証的研究」, 『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』26: 76-88, 岡山大学大学院文化科学研究科.
- 加賀美常美代, 徳井厚子, 松尾知明編, 2016, 「文化接触としてのダイナミズム」, 『文化接触における場としてのダイナミズム』11-13, 東京: 明石書店.
- 木戸志緒子, 2019, 「異文化間教育の視点から見たホームステイプログラムのあり方——寮生活を送る留学生の週末滞在に着目して」, 愛知県立大学大学院国際文化研究科修士論文.
- 栗木梨衣, 2004, 「ボランティアの育成」, 『国際交流の組織運営とネットワーク』80-

- 93, 東京: 明石書店.
- 見城悌治, 1997, 「千葉大学におけるホームステイ・ホームビジットプログラムの現状と課題」, 『千葉大学留学生センター紀要』3: 71-79, 千葉大学留学生センター.
- 鹿浦佳子, 2007, 「ホームステイにおける日本語学習の効用——ホームステイ、留学生、日本語教員の視点から」, 『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』17: 61-112, 関西外国語大学留学生別科.
- 中野祥子, 田中共子, 奥西有里, 2017, 「在日ムスリム留学生の異文化滞在に伴う困難の変容——国立大学理工系学生5名の2年間を振り返る事例分析」, 『異文化間教育』46: 140-151, 異文化間教育学会.
- 日本学生支援機構, 2019, 「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」, 日本学生機構ウェブサイト, (https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html, 2019年10月9日閲覧).
- ハタノ・リリアン・テルミ, 2006, 「在日ブラジル人を取り巻く『多文化共生』の諸問題」, 『「共生」の内実——批判的社会言語学からの問いかけ』55-80, 東京: 三元社.
- 原田登美, 2013, 『留学生の動機とホームステイ——ソーシャル・サポートによる異文化適応へのプロセス』, 岡山: ふくろう出版.
- 馬淵仁編, 2011, 「はじめに」, 『「共生」は可能か: 教育における挑戦』15: i-iv, 勁草書房.
- 溝口博幸, 1995, 「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育——『日本人家庭訪問』の場合」, 『日本語教育』87: 114-125, 日本語教育学会.
- 文部科学省, 2016, 「平成28年度実施施策に掛かる事後評価書(文部科学省28-13-1)」, (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/10/12/1394411_6.pdf, 2019年10月9日閲覧).
- 山口隆子, 2008, 「『ホームステイ』誕生の背景と求められた異文化理解: 世界で最初のホームステイ組織・EILを事例に」, 『神戸文化人類学研究』2: 30-69, 神戸大学紀要論文 (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81003413.pdf>, 2019年10月9日閲覧).
- 吉田千春, 2015, 「混住寮の生活では何が学ばれているのか——レジデント・アシスタントの語りを中心に」, 異文化間教育学会ウェブサイト, (http://www.intercultural.jp/about/excellent/2015_thesis_yoshida.pdf, 2019年10月9日閲覧).
- Watt, Donald B., 1967, "The Experiment Comes into Being," *Intelligence Is Not Enough*, (Retrieved October 22, 2019, <http://www.ourstory.info/library/5-AFSIS/Watt/Experiment03.html>).

Homestay Programs as Components of Intercultural Education:

A Case Study of Weekend Homestays of International Students Living in Dormitories

Shioko KIDO

As of 2018, there are a total of 239,287 international students in Japan. They must balance their studies and daily life activities both mentally and socially. In doing so, it is inevitable for them to interact with a wide variety of people in Japan. The purpose of this paper is to clarify the roles of homestay programs in the context of intercultural education. Homestay is said to be effective in facilitating mutual understanding between local people and students. However, its roles have not yet been thoroughly studied.

A survey was conducted on weekend homestays between January and August 2018 in T city, Aichi Prefecture. An interview was conducted with 14 participants, consisted of international students living in a dormitory, staffs, host families and coordinators of National Institute of Technology. The purpose of the interview was to first grasp the reasons for participation and non-participation of international students and the background to the decision, and explore their perception of interaction through homestay, and then compare them with that of staffs, host families and coordinators.

As a result, international students and coordinators were found to be sharing a common perception of finding a home in Japan by building a family-like relationship through homestay. The international students were longing to engage in various types of relationships with Japanese people outside dormitory and school, while staffs considered homestay as an opportunity to experience local culture in Japan. Behind this longing lies the lack of interaction with Japanese students and the attenuation of relationships in Japan. Their hope to reduce loneliness, build a family-like relationship and meet people outside of their social

circle had led them to participate in the program. In particular, Muslim students explained that it was their concern about religious customs that prevented them from participating. Essentialistic social categorization and stereotyping were observed in both participating and non-participating students.

The study showed that weekend homestays could also be a part of intercultural education by building new relationships in Japanese society. In conclusion, it is important that program facilitators understand the students' perception of interaction through homestay and their hopes and fears for homestay in terms of intercultural education in order to provide students with greater options in intercultural education.